

定時制高校における授業の実際

— 単元「働く」ということ —

守 政 昭 浩

はじめに

本校は七十年以上の歴史を持つ県内でも伝統ある工業高校である。定時制は機械科のみで、生徒数は一年生が九名、二年生、三年生がそれぞれ十一名、そして四年生が十二名、全員が男子生徒である。入学してくる生徒は様々である。全日制を一度は退学したが、高校だけは卒業しておきたいと再び本校の門をくぐる者。中学時代は不登校であったが、新しい環境の中で心機一転、勉強に励もうとする者。しかし、大半の生徒が学力不足から全日制をあきらめ、その結果として本校定時制に入学してくる。入学当初は学習に対して意欲を持っていた生徒達も、だんだんと「学ぶため」から「高校卒業の資格を取るため」「友人に会うため」に学校へ来るようになる。

「生徒が主体的に取り組める授業を」「いかに意欲的に授業に取り組ませるか」等、生徒の学習意欲を喚起する声を聞くたびに、生徒の反応の乏しい形骸化した授業を何とか

しなければと思いつけてきた。そうした時、主題単元による読書指導の実践（注1）や定時制での単元学習の実践（注2）を知る機会を得て、大いに刺激を受けた。そこで、「生徒が興味を持って取り組み、彼らの生きる力を育てられる授業」として単元学習を試みることにした。今回は平成六年一学期に行ったその実践を報告させていただく。

一 単元「働く」ということ」の設定

（一）生徒の実態

対象とした四年生は現在担任をしている学年である。新任一年目に副担任をした後、昨年、今年と担任をしている。入学時は二十名だった生徒も、一歳年上の四名を含めて現在は十二名である。出席状況は比較的良いものの、学習面に目を向けると「授業への遅刻が多く、基本的な学習姿勢が確立されていない」「数人の生徒を除いて学習意欲が極めて乏しい」など多くの問題を抱えていた。こうした状態が

クラス全体の雰囲気沈滞させ、更に学習意欲を低下させていた。

(二) 単元設定の理由

単元学習を四年生で試みようとしたのは、前述のような深刻な問題を抱える学年であったことと、もう一つ担任として気掛かりな点があったからである。それは、就職を控えながら、自分達の進路にあまりに楽天的な生徒の意識であった。平成大不況と言われる中で、アルバイトとは言え仕事に就きながら「今よりもっと楽で給料のいいところ」という理由で将来の仕事を決めようとする生徒達。「何のために働くのか」「将来、何をしたいのか」等、自分の進路を真剣に考えるきっかけ作りをしなければならぬ、そう考えた。そこで、次の二点の理由

①生徒が興味を持ち意欲的に授業に取り組める。

②自らの進路について真剣に考える契機となる。

から、定時制で学ぶ生徒にとって「学校」と並んで大きな柱の一つである「仕事」に注目して単元「働く」ということを設定した。

(三) 単元の目標

①「働く」姿を描いた作品を自らの経験とあわせながら意欲的に読みすすめる態度を養わせる。

②様々な状況の中で「働く」姿を読み取ることで「働く」ということの意義を理解させる。

③「働く」ということについての自らの考えを表現する

能力を身につけさせる。

(四) 単元の構成

「セメント樽の中の手紙」(葉山嘉樹)《三時間》

「はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ぢっと手を見る」(石川啄木)《一時間》

「鉄塔に登る男」(沢木耕太郎)《二時間》

「仕事にかける情熱」(生徒作品)《一時間》

「働く」ということを学んだまとめとして各自の考えを表現させる。《期末考査》

(五) 教材観

『セメント樽の中の手紙』(第一学習社『高等学校四訂版新国語二』)には読む者をひきつけてやまない魅力がある。特に生徒達は、松戸与三の過酷な労働条件、恋人を失った女工の手紙の内容に大きな衝撃を受けるであろう。また、悲惨な労働状況に憤りを感じながらも家族のために働かざるを得ない与三の現実に「働く」ことの厳しさを見い出すのではないだろうか。時代や労働状況は全く違うものの、松戸与三の「働く」姿から生徒達が何かを感じ取ってくれることを期待したい。

石川啄木の「はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ぢっと手を見る」は単元「働く」ということを設定した時、真っ先に思い浮かんだ作品である。「働く」ということの象徴である「手」をどのような気持ちで見つめていたのか。そう考えた時、生徒達は自らの姿をこの歌の

中に見出し、「働く」ことに伴う辛さを知るのではないだろうか。

「働く」といこうとは厳しき、辛さのみが伴うものではない。仕事を成し遂げたという充実感があるからこそ人は働いていると言えよう。「鉄塔を登る男」(大修館書店『高等学校国語I』)は「F電工のごく普通の社員」で、二十数年間、鉄塔に上り続けている。一年に一度の東京タワーの電球交換も彼が手がける。その彼は管理職になった今でも「六十歳の定年まで上りつづけるでしょう」と語る。この言葉には、恵まれた労働環境でないにもかかわらず、真摯に仕事に取り組んできた職業人の誇りが込められている。生徒達はこの彼の言葉に仕事への積極的な意義を見いだしてくれるだろう。

「仕事にかける情熱」(山口県高等学校定時制通信制教育振興会『平成五年度山口県高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会作品集』)は同じ定時制の生徒の作品である。魚の仲買専門の会社で働いている「私」は朝が早く、慣れない仕事であるにもかかわらず無欠勤を続けている。また、後継者不足や年々減っている水揚げの問題を抱えながらも「地域活性化の担い手になるのだという自信」を持って仕事をしている。そうした「私」に生徒達は自分の姿を重ねて見るのではないか。そして改めて自らの「働く」姿を自問自答するであろう。

(六) 指導計画

第一時 松戸与三の過酷な仕事の様子及び生活状況を理解させ、生徒自身の「働く」姿と比較させる。

第二時 女工の手紙の内容と、その手紙が書かれた理由を押さえさせる。

第三時 手紙を読んだ与三の心情を踏まえ、彼にとって「働く」ということがどのような意味を持つものかを考えさせる。

第四時 「セメント樽の中の手紙」を踏まえ、「ちっと手を見る」時の作者の心情を理解させる。

第五時 「鉄塔を登る男」の仕事の内容を理解させる。

第六時 「六十歳の定年まで上りつづけるでしょう。」と語る「私」の仕事への思いを理解させる。

第七時 「私の仕事にかける情熱」を理解し、自らの仕事への意識を喚起する。

第八時 「働く」ということの意義について自分の意見を表現させる。

※ 第五時は一斉指導、第八時は第二学期末考査で、他の六時限は学習プリントを中心にした指導である。

二 単元『働く』と『働く』の実際

(一) 授業の実際

ここでは第二時、第四時、第五時、第七時の授業(国語

II 二単位四十分) について、その実際を紹介する。

〔第二時〕

指導目標	指導展開	生徒の反応
<p>女工の手紙の内容と手紙を書かれた理由をpushさせせる。</p>	<p>・与三の「働く」姿から友人が感じたことと自らの考えを比較させる。</p> <p>・第二段落(女工の手紙)第三段落(与三の思い)を黙読。</p> <p>・手紙の内容や書かれた理由を理解させる。</p> <p>・手紙を読んだ与三の気持ちを書かせる。</p>	<p>・「かわいそう」といった意見の中で「若いうちはおつと苦労すべき」という意見が出た。</p> <p>・手紙の現実性に関心が集まった。</p> <p>・女工に感情移入していた生徒が多かった。</p>

〔第二時を終えて〕

◇ 生徒の意見や感想を授業に生かすこと

自分達の働く姿と比較して、与三の仕事の状況について感じたことを書かせたところ「最近の若者は仕事はきつく

なく、賃金は高く休日が多い方がよく一つの企業にとどまることを知らなすぎる。若いうちはおつと苦労すべきだと思ふ僕は年よりか？」という意見が、ある生徒より出てきた。この生徒は、まだ十九歳であるが、父親の営む水道配管の会社で中心となって働いている。普段から「楽な仕事はない」と語る彼の意見に、一部の生徒からは反論が出た。「わざわざ苦労する必要はない。」「中年になつても苦労してない人もたくさんいる。」等の声があがり、一時対立の様相を呈した。結局、この対立はそのままで授業を進めることとなつたのだが、全体として盛り上がり欠けた雰囲気の中で、うまく授業に取り入れればよかつたと反省をした。

本校の定時制は、どの学年も十人前後の小人数クラスである。彼らは、本文の表現にそつて考えなければならぬ設問にはほとんど答えない。「自分が知つてゐること、自ら経験して感じたこと」などは比較的、自信を持つて話をする。特に三、四年になると気心の知れた仲間であるため、授業中でも思つたことを好きな時に口にする。そして、その意見に対してまた別の生徒が自分の思つたことを言う。こうした意見の交換は大抵、授業の展開上、予想してない場面で起きるが、今回の例でも分かるように、そうした意見が出た時は、やはり授業が盛り上がりを見せる。

小人数で、比較的意见を言いやすい雰囲気のある定時制での授業は、このような自由な意見を柔軟に授業に取り入

れていくことも生徒の授業への意欲を喚起する一つの方法だと思ふ。(ただし、時間や内容に制限を設けておかないと、テーマからはずれてただの雑談で終わる場合があるので注意が必要である) また、こうした習慣が身につければ、設定した課題をもとに話し合いを試みることもできるであらう。

〔第四時〕

指導目標	指導展開	生徒の反応
「ぢつと手を見る」時の作者の心情に迫らせる	<ul style="list-style-type: none"> ・「何のために働いているのか」に対する友だちの考えを知ることで「働く」ことへの意識を喚起する。 ・「生活楽にならざり」に続く部分を想像させる。 ・「ぢつと手を見る」時の作者の心情に迫らせる。 ・与三の「働く」姿と合わせて「働 	<ul style="list-style-type: none"> ・「夢を達成するため」「自分のため」「世の中がそういうふうだから」という意見があった。 ・「身なり変わらざ」という句を想像した生徒がいた。 ・なぜ「手」を見つめるのかという疑問が出

〔第四時を終えて〕

◇ 遊びの要素を取り入れること

今回の石川啄木の短歌は「はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり」までを明らかにして、続く「ぢつと手を見る」の部分を生徒に考えさせた。結局、「ぢつと手を見る」と答えた生徒はいなかったが、この短歌への興味を向けることはできたように思う。実際「どうして手を見るのか」という疑問が、生徒からすぐ出された。仕事で車の整備や塗装をしている生徒が、登校後に汚れた手を丹念に洗っている光景をよく目にする。毎日現場で働く生徒にとって、この「ぢつと手を見る」という七文字は予想していた以上に生徒の心に訴えるものがあつたかもしれない。

また、今回のプリントには石川啄木の顔写真を載せ、名前を当てさせるということを試みた。この問いは、中学校で学んでいたのか、比較的簡単に名前があがった。

短歌の空欄部分を予想したり、作者名を顔写真から考えたりするというのは、どちらも遊びの要素を取り入れた本当に些細な工夫である。しかし、四十分の授業の半分程度

く」ことへの理解を深めさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「ぢつと手を見る」姿に自らの将来を重ねる生徒がいた。
-----------------	---

しかし集中できない生徒がいる現実の中では、こうした一見何でもないような工夫が意外に効果的である。授業への生徒の集中の度合いを見て遊びの要素も有効に取り入れていきたい。

〔第五時〕

指導目標	指導展開	生徒の反応
「鉄塔を登る男」の仕事の内容を理解させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・題名からどんな仕事であるかを想像させる。 ・全文を音読させる。 ・筆者の疑問を押しささせる。 ・仕事の内容を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「鳶職」「佐官」などを想像していた。 ・音読は熱心に聞いていた。 ・東京タワーに登ることに驚いていた。

◇〔第五時を終えて〕

◆ 導入部分の重要性

導入部分でいかに生徒の学習意欲を喚起するか、ということとはどの授業でも意識されることであるが、定時制の授業では特にその重要性を痛感する。まず、生徒が授業開始時に教室にいるということが大前提であるが、この前提がなかなか守られることがない。事実、ほとんどの生徒が教

室にいなかったということもままある。そうした状況の中では、いかに早く生徒の意識を授業に向けさせるかが、その授業を成立させる鍵となる。

本時においては「鉄塔を登る男」という題名から、どんな職業の人かを想像させたが「鳶職」「電気屋」「佐官屋」等の職業名があたり、作品への興味も高まっていたように思う。

これまでの一般的な授業の形では、学習プリントによって、まず授業範囲の漢字を書かせることから始めていた。本文を読み進めながら漢字を書くことで授業への姿勢を作るためである。学習への姿勢ができていないのといないのではその後の展開が全く違ってくる。

また、時には生徒の雑談の中から授業に関連ある要素をみつけて導入することもあった。生徒の意識をこちらに向けておいて、どんなことでもいいから授業へ結びつける。とにかくいかに早く授業をする雰囲気を作れるか、これが四十分という短い時間の中で展開を求められる定時制の授業に必要なことだと思う。

〔第七時〕

指導目標	指導展開	生徒の反応
「私」の「仕事」にかける情熱	・「鉄塔を登る男」の仕事への姿勢	・「熱心だ」「すごい」という感想

を理解し、自ら
の仕事への意識
を喚起する。

を思い出させる。
・全文を黙読させ
る。

が多かった。
・定時制の生徒
の作文と知っ
て驚いた。

・仕事の内容を押
さえ、「仕事にか
ける情熱」を理解
させる。

・「地域活性化の
担い手」になり
たいという事
が信じられな
い様子だった。

・自らの「仕事にか
ける情熱」を書か
せる。

・「個性や能力を
発揮する」「社
会的役割を果
たす」という意
義より「生計を
立てる」という
面を強く意識
していた。

・「働く」というこ
との様々な意義
を理解させる。

◇〔第七時を終えて〕
教材の選択

「セメント樽の中の手紙」の松戸与三や「鉄塔を登る男」の仕事への姿勢に感心していた生徒達も、「地域活性化の担い手」になりたいと語る「私」のこの情熱については懐疑的であった。この「仕事にかける情熱」は、同じ定時制の

生徒の作文ということで、共感を持って読んでくれることを期待していたのだが、生徒は思ったほどの興味を示さなかった。

先にも述べたように生徒達は多くの体験から得た知識に価値を見出し出しているため自分達の価値観を揺さぶる作品に出会った時には、作品にも授業にも意欲的な姿勢を見せる。しかし、作品の魅力が乏しい場合は授業への意欲をほとんど見せない。今回の「仕事にかける情熱」も、同じ定時制の生徒の作文ということ以上の教材としての魅力を見い出せずに終わってしまったように思う。

定時制では特に生徒の体験や興味を踏まえた教材の選択がなされるべきである。そのために日頃から教材としての価値を見定める能力を養っておきたい。

(二) 生徒の作品及び考察

第八時の期末考査では次のような課題を設定した。

① 「セメント樽の中の手紙」の「松戸与三」の生活状況と「はたらけど／＼はたらけど猶わが生活楽にならざり／＼ぢっと手をみる」から、「働く」ということの厳しさについて述べる。

② 「鉄塔を登る男」が語る「私は六十歳の定年まで登りつづけるでしょう」という言葉から、「働く」ということから得られる充実感について述べる。

- ③ 「仕事にかける情熱」の中で述べられている「地域活性化の担い手になるのだ」という自信と情熱から、「働く」ということの意義について述べる。
- ④ ①③をまとめて君達にとって「働く」ということはどのようなものであるかを述べる。

(資料)

S・I君

松戸与三の生活はまずしいけど、自分が子供をたくさんうませるから、これは自分のせきなんだから、しかたがない。ものごとをかんがえないでやるから、こういうことになるのだ。だけど、なんのかんのも一応は、はたらいっているから、いい。

働くというよりは、自分がしなければいけないと思っっている。自分がしなければというきもちがあると思う。

しごとをしているときはえらくて、やめたいと思うけど、なければならぬ、しごとがしたくなる。

自分にとってしごとは、生きていくためには、あそんでいくためには、金があるから。その金のために、自分は、はたらいっているのだ。べつに金があれば、はたらくひつようがない。自分だったら、はたらかない。

でもはたらかなければ、時間があまってしょうがない。あそんでいても、いつかはあきるから、はたらく。

自分のはたらいているのは、そのためである。

T・S君

私は仕事というのは、自分自身の為にしていきます。自分の生

活をもっと楽しくしようと思っただけですが、現実の仕事はそう甘くはありません。授業中に勉強した短歌に「じっと手を見る」という節があった時に、私は自分の手を見てみました。普段あまりみていないこともあり、少しおどろきました。油で少し黒くなった左手。いつつけたのかさへ解からない傷が数個ある右手。これを見ているうちに、なんだかこんなに仕事をしているのに仕事の上では結果的にあまり変わっていない自分が立ってました。

しかし、私はこの仕事を、続けて行くでしょう。なぜなら、私の父をそんな敬しているからです。私は父の背を見て今まで育ってました。父は会社を経営していますが、最前線で仕事をしています。父は、

「自分の仕事は定年というのがない。自分が働ける限り働いてやるぞ。」

とよく言っています。父をここまでかり立てるものは仕事のあとの充実感にほかならないと私は思います。私は一日の仕事が終わると学校があつて充実感にひたっているひまはありません。しかし、仕事で一つの現場が全て終わり、お客様に引き渡す時、もうこの充実言葉では表せないほどの喜びがあります。それをまた味わう為に私はこの仕事を続けているのです。

この仕事をしていると、よく街なかでの仕事に目がいきます。水道、ガス、下水と種類もさまざまですが、もし、自分がすることになるかもしれないと思うことが多々あります。今、この仕事は3Kとか5Kとか言われている若い人がなかなか長くは続きません。しかし私は自分がこの仕事をしなければこの街の水道などは整備できなくなってしまうたら困るのは自分達だということ意識しか持っていないなかつたが、同年代でも地域経済の活性化に参加している人がいるという話を聞いてはすかしにくくなりました。

私はこの作文にあたっていろんな事を思い出してみました、

自分にとって働くという事は楽しいの一言になってしまふのが結論です。働いてれば苦しい事もありますが、その後のよろこびがたまらないのです。自分もたぶん体が動き続ける限り働く事でしょう。

W・W君

このセメント樽の中の手紙に出てくる人は、びんぼう人であり、はたらいでもないところに生活が楽にならない。仕事のたのしさも知らずにただ働いていた人だと思ふ。

この鉄塔を登る男の中に出てくる人は、よくあそこまで登つてゆけるものだと思つた。だがそれでも登るのはなにより、あそこまで登つて、電球をとりかえた人だというプライドがあるからではないかと思ふ。それとこまでやつたんだと言う充実感金は買えないものがある。

この仕事にかける情熱に出てくる人は、仕事への自信と情熱があると思ふ。あと無欠勤であるということもあると思ふ。これらを見て、生活をするためと、たのしさがなければつづかないと思ふ。

T・K君

仕事にかける情熱を読んで、僕は、この人みたいに、地域経済活性化の担い手になるのだという自信と情熱を持つてと書いてあるけど、僕は、ぜんぜん仕事に自信もなく情熱もありません。でも、この文を読んで、これからは、少しでも自信を持ち、情熱を持つようして、努力していきたいと思ひます。

鉄塔を登る男を読んで、思ったことは、この人は、私は六十歳の定年まで登りつづけることでしようと思ひているけど、この人は、たぶん仕事に情熱を持ち、いきがいを持っていると思ひます。僕も仕事に生きがいを持ちたい。

Y・S君

僕はこのセメント樽の中の手紙を読んで、思ったことは、コンクリートが粉々になってセメントと一緒に死んだことはむごい事だと思ふ。そして松戸与三は、家族を養うためだけにこまで苦しい事をしなくてはならないという事は、お金が多まらず、ただひたすら仕事をするしかないと言ふ事だと思ふ。

この鉄塔を登る男は自分しかこの仕事が出来ないと思つているか、それとも自分以上にこの仕事が出来ないと思つていう自信からくる充実感だと思ふ。(中略)

僕にとっての働く事はまず第一にバイクのローンだ。そして残つたお金は別に貯金するわけでもなくただ単に意味もなくただ使いをしているだけだと思ふ。その中でこの今までやつた国語の勉強はそう意味のない事だとは思われない。それはなぜかと言ふと仕事に対する意識や情熱、プライドなどと言ふ、色々な事を勉強したからだ。この今までやつた仕事に關する勉強の中で僕が思ったことは、人生は十八十色と思つた。

この課題に対して生徒が書いた作品を次に考察してみた。

まずS・I君の表現であるが、彼の場合、松戸与三の働く姿に積極的な意義を見いだしながらも、その考えが自らの働く意識へ反映されていないように思われる。

それに対しT・S君の表現は、働くことの厳しき、充実感が体験を踏まえて見事に表現されている。「自分の手」を眺め、厳しい仕事の状況を見据える彼の目は、同時に誇りをもって仕事に取り組む「父の背」をも見つめている。「働

くという事は、楽しい」と述べる彼にとつて「生きる力」は徐々に養われているのではないだろうか。

W・W君は、「生活していくためには、どんなにいやでもさけて通ることのできないもの」「たのしさがなければつづかない」ものとして仕事をとらえ、働くということの厳しい面、辛い面に目を向けている。

T・K君とY・S君の表現は自らの体験との関わりは薄いものの、「仕事に対する意識や情熱、プライドなど」を学んだり「仕事に生きがいを持ちたい」という意欲を培ったりするなど前向きな姿勢が表れている。こうした姿勢の中から彼ら自身の「生きる力」が養われていくことを期待したい。

三 単元「働く」ということ」の成果と課題

まず、単元「働く」ということ」の成果と課題を単元の目標の面から考察してみたい。

① 「働く」姿を描いた作品を自らの経験とあわせながら意欲的に読みすすめる態度を養わせる。

「意欲的に読みすすめる態度を養う」という面に目を向けるならば、生徒は予想以上に興味を持って作品を読んでくれたように思う。特に「セメント樽の中の手紙」は作品の持つ魅力を生徒が十分感じ取っていた。この作品の教材

としての魅力を改めて認識することとなった。

「はたらけど／はたらけど猶わが生活業にならざり／ちつと手を見る」「鉄塔を登る男」も比較的関心を持って授業にのぞんでいた。ただ、生徒作品の「仕事にかける情熱」は期待したほどの反応は得られなかった。

しかし、「自らの経験とあわせながら」読むという点には大きな課題が残った。確かに「セメント樽の中の手紙」では、生徒の体験談が授業に大いに役立った。だが、最終時の生徒の表現にも見られるように、小説を読むということの基本的な方法が指導できていなかったため、経験に頼った読みをさせる結果となってしまう。これまでの読みの指導の不徹底を痛感した。大いに反省すべき点である。

② 様々な状況の中で「働く」姿を読み取ること、「働く」ということの意義を理解させる。

「働く」ということの意義については、「生計を立てる」という面が生徒の中で相変わらず大きな位置を占めていた。「個性や能力の発揮」や「社会的な役割を果たす」などの意義については「この今までやった国語の勉強はそう意味のない事だったとは思わない。それはなぜかと言うと仕事に対する意識や情熱、プライドなどと言う、色々な事を勉強したからだ。」というY・S君の感想はあるものの、十分理解させることができたとは言えない。

今回は四つの作品を扱うにとどまったが、「働く」という

ことの様々な意義を理解させる上でも、もつと多くの作品を教材として取り上げてもよいだろう。多くの作品を読むことで、「働く」ということへの意識がより深まってくるのではないだろうか。

③ 「働く」ということについて自らの考えを表現する能力を身につけさせる。

この目標が最も達成できていなかったように思われる。まず、「働く」ということについての自らの考え」がまとめられていなかった。前項の「働く」ということの意義」が押さえられていなければならなかったのだが、この段階で仕事の意義を十分理解させることができず、それが内容に大きく影響した。

次に「表現する能力を身につけさせる」についてであるが、この点に関しては、事前の作文指導がなされていなかったことが大きな原因である。生徒の書くことへの抵抗感や内容の程度が把握できていただけに、事前の指導は当然必要であった。

作文の指導に関しては、これまでも系統立てた指導をしてきたとは言いがたい。しかし、T・S君のように仕事への情熱を自らの生きる力として表現している生徒もいる。今後は彼のように自らの生きる力を生徒それぞれが自由に表現できるように十分な指導を心掛けたい。

次に、定時制の実際の授業において有効であった点と課題をもう一度まとめしておく。

① 定時制の授業では、やるべきことが書かれてあり目的のはっきりしているプリント学習が有効であるが、その作成においては、生徒の意見を引き出す問いを設定するのが望ましい。

② 様々な経験を持つ生徒の多い定時制では、生徒の体験談を積極的に授業に取り入れることで、生徒が意欲的に授業にのぞみ活気が生まれてくる。

③ 生徒は自分達の興味と結び付いた作品や、経験から得た価値観を揺さぶる作品に大きな関心を示す。また、そうした作品への興味を持続させるためには、生徒同士で意見を交換させたり遊びの要素を取り入れたりした授業の展開が有効である。

④ 定時制の授業では、導入部分で生徒の学習意欲をいかに喚起するかが重要となってくる。そのため、日頃から学習姿勢を早く確立できる雰囲気作りを心掛けなければならぬ。

⑤ 定時制の生徒達は特に書くということに抵抗感を表す。「書きたいこと、書かずにおれないこと」を持たせる（注3）指導を常に心掛けて、表現することで得られる充実感を味わわせたい。

最後に、全体を通じての大きな反省点を一つ述べておきたい。それは、授業をしていく中で、どのような「ことばの力」を育てるのかという点が常に明確に意識されていなかったということである。逆に言えば「働く」ということの意義を理解させる面への目が向いていたのである。これは、単元全体をふりかえつたみた際、今一つ手ごたえを感じる事が出来なかったということと無関係ではないだろう。

「単元学習とは学び手の興味・関心・必要に根ざす話題をめぐって組織される一まとまりの価値ある活動であり、それによってことばの力、学ぶ力、生きる力を適正に育て得るもの」(注4)と定義されるならば、今回の一連の学習は、単元学習によって育てられる重要な力を欠落させていたと言える。

今後の単元学習では「学ぶ力」「生きる力」そして特に「ことばの力」を育てることを大きな目的として実践に励んでいきたい。

おわりに

単元『働く』ということ』は『教える』ということ』を考える契機となった。漠然としていた教えるということの輪郭がぼんやりではあるが見えてきたような気がする。「えらいのは、仕事をしている人間みないっしょだ。」と表

現した生徒は消防士を目指して公務員試験の勉強に励んでいる。「父をそんな敬しているから」家の仕事を続けていくという生徒は、見聞を広めるために応募した定時制海外派遣生徒に選ばれ、この夏、日本を離れる。「どうせやめるから、金があつたら別にいい」とだけ書いた生徒は「人に感謝される仕事がいい」と理学療法士になる道を選んだ。自ら目指す仕事への思いをこれからもずっと忘れずにいてほしいと思う。また、私自身も充実感を求めて教壇に立つ気持ちを忘れずにいたい。

(注1) 本単元の計画、実施等については石津正賢先生「国語科における指導方法の一方——主題単元『生きる』ことは、なぜせつないのか?』を通して」(平成五年十一月九日、高教研図書館部会)を参考にさせていただいた。

(注2) 片桐啓恵先生「人との出会いの中でことばの力を育てる——外国の人とのインタビューを通して——」(平成四年八月十一日、第三十三回広島大学教育学部国語教育学会)

(注3) 大槻和夫先生「国語の学力と単元学習」(「国語単元学習の新展開Ⅰ理論編」東洋館出版社四十九ページ)

(注4) 同、四十五ページ

(山口県立宇部工業高等学校)